
ニキビ

ユキタテイシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ニキビ

【Nコード】

N8209B

【作者名】

ユキタテイシ

【あらすじ】

あたしは同じクラスの片山と誰にも内緒で付き合っている。その訳は、片山には本命の彼女がいるから。あたしは片山の二番目なんだ。

第1話

「彼女のいる男なんて興味ないよ」

そう言っただけはちらつと窓際を見た。

柱にもたれかかって3人組で楽しそうに話している真ん中の男に視線を送った。

「えーホント？若菜ちゃん」

ニヤニヤしながら腕をつついてくる亜矢子に笑顔を返して、もう一度窓際を見る。

昼休みの教室のざわめきに紛らわしたけど、内心はわざと聞こえるように言っただけだった。

真ん中の男、片山直樹はそんなあたしの事など気付いていない様子で笑っている。

予報が当たって昼前からぱつぱつと雨が降り始めていた。

雨は嫌い。

こんな日は、学校なえなければ家の中にこもってしまいたくなる。

あたしは体を隠すようにして彼、片山直樹にしがみついた。

かすかな香水の香りがして、大きな手がゆっくりあたしの髪をなでた。

「さっきの話・・・」

薄暗い廊下、耳障りな雨音に紛れて片山の低い声が響く。

言いかけて「なんでもない」と言った。

カムフラージュだよ。とあたしは心の中でつぶやいた。

さっきあたしたちが話していた事を片山は聞いていたらしい。

少しは気にしてんのかな？そんな事で小さな優越感を噛みしめる。

第1話（後書き）

感想待っています！

第2話

校舎の一番奥にあつて人通りが少ないトイレ、その脇にひっそりとする東階段。

小さな窓が一つだけある踊り場、ここであたしと片山は人知れず「デート」をする。

男子の中ではけっこう目立つ片山と、特別美人でもなんでもないあたしが秘密で付き合つてるなんて、みんなを出し抜いてる感じがして実はちよつと気分がいい。

スリルを楽しんでるのもあるけど、隠してる本当のわけは片山には他校に、本命の彼女がいるから。

「日曜日どっか行こうよ」

あたしは無理なお願いをわざと言ってみる。

他校の彼女とは土日デートするしかない。

もつとも片山は帰宅部だから学校が終わってからいくらでも会つてるんだろうけど。

あたしとは校内の、しかもこの東階段でしか会わない事になってる。

「あー・・・」

と、いつもどおり曖昧な返事をする片山。

片山の匂いに浸りながらあたしは思つてた。

このままずっとここで抱いていてくれればいい——・・・

その時彼のケータイが鳴った。

びくつと肩が震えたのを気付かれたと思うと悔しかった。

片山はさつとあたしから手を離し、悪びれる様子もなく慣れた手つ

きでメールを打ち返す。

仰々しく「誰から？」なんて聞きはしない。
メール画面はここからでは見えない。

・・のぞくつもりもないけど。

彼女へのメールを送信し終えたらしいケータイは彼のポケットにしまわれる。

そして片山は思い出したようにまたあたしを抱きしめる。

だからあたしも何事もなかったふうにしてその首に手をまわす。

「キスしてよ」

彼のくちびるがあたしに触れる。

第3話

あたしが実際に片山の存在を知ったのは新学期が始まってまもなくの事だった。

彼は一年の頃からあたしの周りでもカッコいいとウワサにはなっていた。それまではクラスの男子たちに特別興味はなかったし、そりゃカッコいいと思う子にはいたけど、アタックして彼女になるうなんて考えは持たなかった。

細身で背が高く、サラサラのうす茶色に染めた髪。重い奥二重のあたしとは大違いのくつきりとした二重。片山の周りにはいつも誰かがいて男子からも女子からも人気がある。確かにウワサになるだけの要素は十分持っていた。

その日。

忘れもしない、春に似合わずひどい雨が降っていたあの日。

あたしは三年の女子から呼び出されていると文句をつけられていた。

彼女たちが言うには、あたしの目が人をバカにしているみたいで頭にくるんだそうだ。

目つきの悪さに因縁をつけられるのはこれまでにもあった。

でもその日の朝から続く雨に心底うんざりしていたあたしは、つい先輩たちに反抗的な態度をとってしまい、いちゃもんだけでは済まされなくなってしまった。

もちろん少しは反撃もしたけど、でも3対1なんて卑怯だと思う。

あたしは散々突き飛ばされて平手打ちなどくらったあげく、靴下のまま外に放り出されてしまった。

怒りと悔しさから涙が込み上げてきて、あたしは一人ずぶ濡れになりながらしばらく立ちすくんでいたと思う。

人前で泣くなんてみつともない事するくらいなら、死んだ方がマシ。
けど今は誰もあたしの事なんか見てないし、もし誰かに見られて
も雨が涙を流してくれる——・・

その時だった。

第4話

ふと、それまで頬を打っていた雨の冷たさを感じなくなった。
止んだのではない。

振り向くとビニール傘を持った片山が立っていた。

人に見られた！と、とっさに涙を拭う前だった。

雨と涙でぐちゃぐちゃになったあたしの顔を見た彼が、かすかに笑ったように見えた。

それが優しい微笑みなのか、嘲った笑いなのかはよく分からなかった。

「直樹！」

S学園の制服を着た女の子が遠くで呼んでいる。

自分の名を呼ばれたらしい彼は傘をわたしに押し付けて、そのまま背を向けて行ってしまった。

そして女の子が持っている赤い傘に入る。

あたしは二人が雨の運動場を歩いて行くのをぼんやりと眺めていた。

落ちるのなんて簡単だ。

たったそれだけの事だった。

その時からあたしの中でクラスの男子の一人が「片山」になった。

現場は目撃してる。

彼女がいることは知っている。

でもその日以来あたしは片山を目で追ってしまっし、どうしようもなく考えてしまう。

傘の一件からあたしたちは徐々に親しく話すようになっていった。

そしてある日東階段に彼を呼び出し、「彼女いてもいいから」と告白した。

あたしの言動に最初はかなり戸惑った様子の片山も一度は断ったが、ふられてもなお諦めようとしないうちにあたしに押されたのか、そのうちに何も言わなくなった。

かくしてあたしは片山の浮気相手、（と言ってしまえば身もフタもないが）校内限定彼女になったのだ。

第5話

「あたし、片山の前ではいい女なの」

いい女って言っても、都合のいい女だけだ。

「その、お前らってつまり・・・」

机を挟んで向かいに座っていたクラスメイトの柳が、言いにくそうに口ごもる。

さつきからあたしのお菓子を遠慮もなく食べまくっている柳優一というこの男は、親友？とまではいかないけどっこーなんでも話せる仲。ウワサ大好きで口の軽い女の子たちよりよっぽど話しやすい。だからなにかというあたしは柳とつるんでる訳だけど、周りからはあたしと柳が付き合ってると思われてそうだ。

彼が言わんとしている事はすぐに分かった。

やっているかやってないか？

今クラスではその手の話題であふれている。

ちゃんとした彼氏がいて経験済みの子はまわりの子たちからたちまち質問攻めとなる。

そこへきて彼女のいる男と付き合っているあたしなんかは格好の興味の対象となるわけである。

隠していても、ウワサになっているのにはさすがに後ろめたい気がした。

片山を気遣うつもりではないが、興味本位な彼女達の目をごまかすのも随分うまくなったと思う。

柳は唯一、あたしの相手が片山だと知っている人物だったが、彼も例外なくそれが気になるみたいだった。

実を言うとあたしたちはまだ一度もそーゆー事をしてない。

「まだだよ」とだけ言ったら、あからさまにホッとした顔をした。

あたしがそれをじっと見ていたので彼はバツが悪くなったのか、不意に

「こんなところにニキビがあるぞ」

と、二日前くちびるの横にできたマヌケなニキビを指さして言った。
あたしが無言でそのニキビを潰してみせると彼はあつと声をあげた。

「潰したら跡になるだろ」

そんなの知ってる。

知っていてあたしはニキビを潰す。

そうしていつも傷が、ニキビが腫れる前に膿をしばらくだすの。

第6話

このごろ片山はかまってくれない。

本命の彼女の相手に忙しいのか、メールの返事もあつたりなかったりという日が続いていた。あたしの事はもちろん彼女には内緒にしてるだろうし、バレないようにうまくやるのはそりや大変か。

・・なんて人事のように思ってしまうのもこの状況のせいかもしれない。

今からこんな擦り切った考えになっていて、いつかちゃんと一人の人と恋愛をするときに純粋な気持ちで向き合えるものだろうかと思ったりする。

あたしたちにはまだキス以上のことはない。

彼女の存在を知った上で近づいたのは、身体だけの関係でもかまわないという意味も含んでの事である。

少なくともあたしはそのつもりだった。

だから直接口にはしなくても、早くしてくれればいいのにといつも思う。

今以上の関係に進まないのは片山が後ろめたいからなのか。

彼女に対して？たぶんあたしにも。

なんだか言い訳を作っているようでズルい。

あたしはあたしの思うように行動してきた訳だし、彼女に対して後ろめたいとか申し訳ない気持ちになるのは片山だけでいいのである。

そうだ、何も卑屈になることはない。

長い廊下はまっすぐと、遠くに生徒たちの笑い声が響いている。いつもの階段で片山と並んで座っている。

踊り場の小さな窓から入る日差しが、二つの影を階段に映している。あたしのピンクのイヤホンを片耳ずつ分けて、なんとかっていう口ツクバンドの曲を聞いている。

第7話

ロツクは片山が好きなので、あたしも最近一緒に聞くようになっていた。

こんな事でも時間を共有できるってうれしい。

なんとなくおだやかな時間。

彼おすすめという曲は実はうわの空になっていてあたしはさっきから片山のことがばかり見ている。

おでこから鼻筋にかけてのきれいなラインを目で追い、音楽に聞き入って無防備なその横顔をずっと見ていたいと思っていた。

そして引き寄せられるように、歌詞カードに気をとられている片山の顔をぐいと引き寄せてあたしから静かにキスをした。

くちびるをそつと離すとその目をじつと見つめる。

そして、それは合図になる。

「目閉じて」

片山はキスをする時にはいつも言う。

あたしの目が開きつばなしになってるのが気になるようだった。

それでもあたしはなおも見つめ続ける。

あたしを見て。あたしだけを。

それこそ片山の目に穴があくと思う程見つめる。先輩たちに言われたように睨めつけると言ってもいい。

先に反らしたのは彼だった。片山の大きな手があたしの視界を遮り、

目隠しのような状態になってそれからゆっくりと、開いたままのあたしの唇を塞ぐ。

そのままゆっくり倒れ込んだ。

なんで？

なんで見ようとしなの？

それまで肩にそえられていた手が、さりげなく服の上から胸に触れた。

思わず全身に力が入るが、ここで動揺して無理してると思われたくない。

必死でその動きを受け入れていると、今度は服の裾から入ってきた手が直接肌に触れた。

彼の指先はひんやりしていて、自分でも鳥肌が立ったのがわかった。緊張してるのが絶対にバレた・・恥ずかしい。

第8話

あたし、今きつと顔が真っ赤だと思う。

ちらつと見たけど、片山は相変わらず涼しい顔をしている。

そうだよ。こんな事、彼女にいつもしてるか。

そうこうしているうちにも手がどんどん入ってきて、でも、ブラのホックに手をかけたところでその動きがピタと止まった。

「片山・・・？」

またメールだ。

今度はバイブにしていたみたいだからあたしは気付かなかったけど。

「ごめん、呼び出し。俺行かなきゃ」

あたしの体を起こして立ち上がり、階段を降りていく片山。
ほてった頬とまだバクバクいつてるあたしの心臓を残して。
そのうしろ姿をあたしは睨みつける。

もしあのまま続けていたら・・・？

なんであたしとしようとしないの？早くやってくれればいいのに。

呼びとめて「続きは彼女とやれば」と、嫌味の一つでも言ってやれたらどれほどよかったか。

言えないあたしは一体何なんなんだろう。

片山はいつも何の後ろめたさも見せずにあたしと彼女を往復する。
いや、学校の中だけしか会えないなんて彼女とも対等じゃない。
ホントに都合いいだけの女になりさがってるんだな、とあたしは舌
打ちをする。

部活があるからと柳にまでフラれたあたしは一人で帰るしかなかった。

こんな時は好きなだけ彼にグチを聞いてもらうに限るのに。

片山には言えない不満も柳になら言える。

柳にとってはかなり迷惑な事かもしれないけど。

駅を出てにぎやかにネオンがちらつく街を歩く。
気紛れにシヨップを見て回ってもなんだか気が晴れなくてもう帰ろ
うとしていた。

雨が降りそうだ。

第9話

ふと、見上げた向かいの道を歩く人物が誰だかはすぐに分かった。

こんな距離からでも、うしろ姿でもすぐに片山とわかってしまう事はやっぱり好きだからとも思いつし、時々すごくみじめでもある。

隣にいるのはS学園の彼女だ。

あたしはとつさに近くの看板に隠れた。

腕を組んだ二人。彼女がやや寄り添うような形だ。

彼女を見たのはこれが初めてだった。

遠くからでもかわいい感じの子だと思った。

背の高い片山と並んで頭ひとつ分くらい低い彼女も女の子の中では背が高い方かもしれない。

二人は慣れたそぶりでラブホテルに入っていく。

制服だとか、誰かに見られるなんて事は少しもかまわない様子で、堂々としていた。

信じられない。さっきまで階段であたしとキスしていたクセに。

あたしに触れていたその手で彼女を抱けるの——？

事実として知っていても実際に見るのとは訳が違う。

あたしは自分の中で嫉妬というものが激しく渦巻くのを感じた。

今日は朝から雨が降っている。

昨日の光景がどうしても頭から離れなくて、夜はよく眠れなかった。メールで東階段に彼を呼び出し、あたしは一人で屋上に立っている。冷たいしずくが身体にしみこんでいくのを感じる。

片山が傘を差し出した、あの日と同じ雨で。

「内田!？」「何してんだよ!？」片山が走り寄ってきた。

不可解なあたしの行動に戸惑っている様子だ。

普段は見せない表情だった。もっと見ていたいと思うような顔だった。

あたしは片山の体に勢いよくぶつかった。

そして言った。「もういいでしょ。あたしのモノになってよ。」

第10話

ホテルのドアを、勢いよく閉めるとあたしは雨に濡れたくちびるを夢中で押し付けた。

角度を変えて何度もキスをし、大き過ぎるくらいに口を開いて片山の舌を待った。

ベットに移動してからは彼に任せた。

片山があたしの服を脱がせ肌に触れると、冷たい肌にみるみる熱が広がってきて、他の事は何も考えられなくなってしまう。

文字通りされるがままにするしかなかった。

窓を打ち付ける激しい雨音が絶えず部屋に響いていて、それは今のあたしの心境にも似たところがあつて、そのせいか少しだけ心を落ち着かせた。

この時ばかりは雨が降っていて良かったと思つた。

片山の大きくうねつた肩ごしに天井を見上げていたあたしは、彼の目を見ることができなかった。怖かつたのかもしれない。

こんなに向かいあっているのに、目と目で話せる距離にいるのに、今、体の一部で初めて繋がっているというのにそれがひどく寂しい事に思えてきた。

たまらなくなつてわたしは目を閉じる。

雨音を聞きながら、揺れている体が自分とはどんどん離れていってしまうように感じて。

片山があたしの中に吐き出すその瞬間は、痛みとか後悔とかとにかくいろんなものがぐちゃぐちゃになって襲ってきて、声を出さずに泣いた。

片山は荒い息を落ちつけた後、あたしの頭をポンポンと二回なでた。そして一言、「ごめん」と言った。

そのごめんがどんな意味合いのごめんなのか、その後はあたしの目を見ようとしなかった。

あたしは自分の中で何かが小さく音をたてて崩れるのを感じた。

第11話

セックスなんてこんなものかと思った。

あの日崩れていったのは、半端な好奇心と欲にまみれた塔だったのかもしれない。

ドラマとか漫画で言われる「次の日大人になった気分」は味わえなかったし、なれない。

あたしの中で何かが終わって、これ以上は意味なんてないということをもう知ってしまった。片山はあたしを選んだりはきつとしない。一人放り出されたみたいになる。

あれ以来片山とはメールも、話もしていない。目も合わさない。

向こうからもなにもない。

このまま終わってしまうのだろうか？それでもいい。今はどうだっていい。

校門前の渡り廊下を一人歩いていると、門に誰か立っているのが見えた。

S学園の彼女だ。と思ったとたん向こうもあたしの存在に気づいたようでつかつかとこちらに向かってきた。そして突然胸ぐらをつかまれた。

「あんた直樹とやったんだって？」

不自然なくらいストレートなロングヘアの毛先が顔に突き刺さりそうになった。

ぐっと近づいたその顔は怒りで青ざめている。

釣り合う彼女ってこの人のようなを言うんだろう。

くつきりとした二重で目も大きいし、鼻もくちびるも小さくて上品近くで見るとお化粧もちゃんとされててやっぱり美人だわ、と場違いな事を思った。

この状況でこんな事を言ったらどうなるかは分かっていたけどあたしは言った。

「あんたの彼氏あたしにちょうだい」

青い顔にカツと血が上るのを見た気がした。

白い手が勢いよくとんできて、あたしの頬をバシッと叩く音がろうくに響いた。

予想通りの反応にあたしは嘲笑し、彼女を見上げた。

第12話

——涙。

大きな目からぼとぼとこぼれ落ちてくる大粒の涙。

上下びつしり塗られたマスカラのふちから溶けだして、黒い涙に変わっているけどそんな事がまう様子もなく、彼女は黙って涙を流した。

そして黙って、もう一言も何もしやべらなかった。

それで充分だった。

もしも彼女が散々あたしを罵^{ののし}ったり、その可愛い顔からは想像もつかないような汚い言葉をあたしに浴びせたなら、あたしは内心彼女を軽蔑し、勝ったという気にさえなるかもしれない。

でも、これは勝ち負けの話じゃない。

片山と寝ることであたしは彼女に勝った気にはならなかったし、それでも言葉や視線で非難されるその方がずっとマシだった。

あたしは二人の現場を目の当たりにするまでは彼女を妬んだりはしてなかった。

彼女は「外」の人間で、問題は「内」。

あたしと片山二人の事だと思っていたから。

あたしの恋い慕う気持ちや、欲望や怒りの対象はあくまでも片山であって、彼女はその中に深くは関わってはいなかった。

ぶたれた頬がまだじんじん痛んでる。

あの女、見た目よりずっと力があるな。

口の中を切ったのか鉄の味がする。

ちくしょう。あたしも一発叩き返せばよかった・
大きなため息をついた。

バカみたいだ。終わってみればなんてことはない。

そして唐突だが、ニキビみたいだと思った。

あたしはニキビができたら潰してしまうけど、^{うみ}膿をしばらくした傷
の上から塩を塗るような真似をして何になるというのだろう。

跡を残してどうするつもりだったのだろう。

最終話

「あたしも、泣けばよかった？」
初めてだったのにつて泣けばよかった？

傷つけるだけならそのままにしてくれたらよかった。
ごめんなんて謝ってほしくなかった。

「泣けば。俺には全然いい女に見えないから」

気がつくとも柳がうしろに立っていた。

我慢できなかった。その必要もなかった。
すでに崩れていた塔は、せき止める力を失って次々とあふれてくるようだった。

あたしは存分に泣いた。

片山の前では決して見せるかと思っていた泣き顔を、柳の前では惜し気もなくさらして、それこそ気が狂ったかと思われる程声を張り上げて泣いた。

好きだったよ。本当に好きだった。
でも体の関係になっちゃいけなかったんだ。

いつかはそれで良かったと思える日がくるのかな？

どれくらい泣いたか、しわしわになったシャツの袖が伸びてきてあたしの顔をゴシゴシと乱暴に拭った。

かすかなせっけんの、優しい香りがして、落ち着きを取り戻した心に余裕をもたせた。

この人はなんでいつもあたしに優しくしてくれるんだろう。

柳の本心を探ってみようと、その目をじっと見つめてみる。

薄茶色の髪の毛が夕日のオレンジに透けてきれいだと思った。

その下からのぞく大きくて切れ長の目が、哀れみと少しの非難を含み、だけでも優しい色をしてそこにあった。

もしかしてあたしの事好きなのかな？

一瞬そんなうぬぼれが浮かんだけど、やっぱり違う違うと打ち消した。

彼はそんなあたしの胸中を察したのか、屈託なく笑って「ブス」と言った。

「完」

最終話（後書き）

未熟な作品ですが、最後まで読んでくださってありがとうございます！！

感想などいただけたら今後のはげみになります

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8209b/>

ニキビ

2011年1月13日02時52分発行